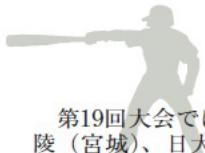


2022 大会プレイバック

<マスターズ甲子園2022・第19回大会> 2021-2023シリーズ第2幕



第19回大会では、各地方予選大会で代表権を得た、宮古（岩手）、東陵（宮城）、日大東北（福島）、利根商（群馬）、浦和学院（埼玉）、国府（愛知）、海星（三重）、御所実（奈良）、日高中津（和歌山）、生野（大阪）、八頭（鳥取）、宇和島東（愛媛）、池田（徳島）、小倉東（福岡）、熊本工（熊本）、鵬翔（宮崎）、鹿児島商（鹿児島）、浦添商（沖縄）の18チームに加え、長野県選抜、島根県選抜の計20チームが出席しました。

生野OB（大阪）は現役高校野球部も甲子園未出場であり、高校創設以来、悲願の甲子園初出場となりました。また、浦和学院OB（埼玉）、熊本工OB（熊本）はマスターズ甲子園初出場、日大東北OB（福島）はマスターズ甲子園大会最多の6回目の出場となりました。

これらの出場20チームの計910人の選手がベンチ登録、このうち高校時代での甲子園非出場者は734人でした。

最年少は18歳の海星OBの木村祐太氏、八頭OBの金谷陽向氏・山本麗楽氏、日高中津OBの仲愛奈氏、島根県選抜の木原淳耀氏の5名、前回大会に引き続き、御所実OBの高橋寛氏が最高齢(87歳)で出場しました。

また、今大会19歳である15名については、高校3年生の夏、コロナ禍により第102回全国高校野球選手権大会が中止となり、各都道府県の独自大会で引退した102回世代の選手でした。高校最後の夏に目指すことすら叶わなかった念願の甲子園の土を今大会で踏みました。

そして、国府OBからは元大洋で80年代後半に正捕手も務めた市川和正氏、島根県選抜からは中継ぎ投手として1985年の阪神日本一にも大きく貢献した福間納氏(元ロッテー阪神)、熊本工OBからは高校通算61本塁打で「九州のカブレラ」と呼ばれた山本光将氏(元巨人)、さらに東陵OBからは相原和友氏(元楽天)、御所実OBからは木村敏靖氏(元楽天)、小倉東OBからは豊原哲也氏(元阪神)、鹿児島商OBからは川崎成晃氏(元ヤクルト)と7名の元プロ野球選手が参加しました。

選手宣誓は、創部100周年となる今大会にて、現役・OBを通じて初の甲子園出場を果たした生野OB(大阪)の監督・関谷祐樹氏が務めました。

式典司会は高校野球選手権大会の初代学生司会者である山内佑利子氏が担当。

また、かつて夏の高校野球選手権大会の開会式入場行進でプラカード係を務めた市立西宮高校OGが、開会式入場行進でのプラカード先導役を務めました。

その他、かつて甲子園に憧れた審判員、スタッフもそれぞれの想いの詰まった甲子園デビューが実現しました。

